

うずらをたまごから、育ててみよう！

沼津市立愛鷹小学校

4 年 勝亦奏心

1. 研究のきっかけ

学校の図書館で読んだ生き物の飼い方の本に、「うずらを卵から育てられる」ということがのっていた。私はうずらを育てることに興味がわき、自分でも育ててみたいと思った。また、スーパーで売っているうずらの卵もふ化することがあると知り、ふ化させることにも挑戦しようと思った。

2. 研究の方法

- ・うずらについて調べる。

うずらについての本は少ないので、インターネットで、うずらを飼っている人のブログなどからも調べる。

- ・卵を温める入れ物(ふ卵器)を作って、卵をふ化させる。
- ・毎日様子を観察し、ふ化するまでの様子を観察する。
- ・ひなを育て、成長の様子を観察する。
- ・うずらが生んだ卵は、美味しくいただく。

3. 研究の結果

(1) うずらについて

大人のうずらは全長 20 cm、つばさを広げると 10 cm 前後になる。1～2 か月で大人になり、メスは約 6 週間で卵を産むようになる。卵を産ませるために飼われているメスの平均寿命は 2 年に満たないが、一生で 350 個前後の卵を産む。

うずらの卵の表面には茶色のまだら模様があるが、これは敵から卵を守るカモフラージュ効果があり、1 羽のメスが生む卵は、同じような模様だと言われている。

(2) スーパーで売っているうずらの卵について

オスとメスは、胸の羽の色が違う。オスは濃い茶色で、メスはまだらの模様のあるものが多い。しかし、たまにメスに似た模様のオスがいるため、オスとメスの選別漏れが起こり、スーパーで売っている卵にも有精卵が混じることがある。有精卵がまじる確率は 1/20 くらい。

(3) ふ化の条件

- ・37.8 度位で温め続ける。
- ・湿度は 50～70%を保つ。
- ・温め初めて 15 日目まで 4～6 時間ごとに転がす。(転卵)
- ・平均 17 日でヒナが生まれる。



〈孵卵器の中の様子〉

(4) ふ卵器について

専用のふ化用の機械も販売しているが、今回は発泡スチロールの箱と、は虫類や小動物用のヒーターを使って母と作製した。ふ卵器の中に温度計や湿度計を設置し、1 日動かしてみても温度や湿度

が保たれていることを確認してから、卵を入れた。

(5) ふ化までの観察

近くのスーパー3軒でそれぞれうずらの卵を1パックずつ購入し温めたが、ふ化しなかったため、インターネットで有精卵を30個買って、どの卵かわかるように1つ1つ番号を書いた上で、作ったふ卵器2つに分け、温めることにした。

暗いところで卵に光を当てると中が透けて見え、成長の様子が確認できる。これを検卵という。

5日目と9日目に検卵を行った。温度が下がらないように、急いで作業するようにした。5日目では、卵の半分位～全体が赤くみえるものが多くあった。9日目では、全体が赤いものや、ヒナができてきているのか透けて見えないものが多くあった。



〈検卵 5日目〉



〈検卵 9日目〉

(6) ヒナの誕生

温め初めて17日目の朝に、合計9羽のヒナが誕生した。

全てのヒナが、卵のとがっているほうではなく丸いほうを、中から1周くちばしで上手に割って出てきた。

生まれるとすぐにピヨピヨ鳴いて、元気に動き回っていた。

羽が乾くころになると、えさを食べ始めた。ヒナたちはみなくっついて、一緒に行動していることが多かった。



〈ふ化 直後〉



〈ふ化 2日目〉

(7) 生まれなかった卵

21日目まで温め続けても生まれなかった卵は、死んでしまったと判断した。

検卵してみて、中で動きがないことを確認してから、ハサミで卵を割って中を確認した。あと少しで生まれそうな大きさまで成長したものから、温め初めてすぐに死んでしまったと思われるものまで、いろいろだった。



〈ふ化直前まで成長した卵〉



〈あまり成長できなかった卵〉

(8) 成長の記録

ヒナは保温が必要なため、水そうに新聞や木くずを敷いてヒーターをつけて飼育した。

5日目には、もう大人の羽がところどころ生えてきてびっくりした。

10日を過ぎると、ジャンプするときに羽を羽ばたかせて飛ぼうとするようになった。体はだいぶ大人の羽が生えそろったが、頭だけヒヨコのままのような状態になった。



〈オス〉



〈メス〉

28日目、大きくなって水そうが狭くなり、中で飛び回るようになったので、父にベランダに鳥小屋を作ってもらい、移動させた。

38日目、いつの間にか、頭にも大人の羽が生えてきて、大きさも成鳥ほどになっていた。昼間は日の当たるところで足を伸ばしてくつろいでいた。

57日目、メスがはじめて卵を産んだ。オスがメスを追い回したり、たまに突っつきあってケンカをしたりするようになったため、傷ついてしまったうずらは、その度に治るまで室内の飼育ケースで飼育した。オスは頻繁に首を伸ばしながら「コッケキョー」と大きな声で鳴くようになった。

(9) 卵について

57日目にメスが卵を産み始めてから、ほぼ毎日1つずつ卵を産むようになった。

メスは、普段は「ピピピ」と鳴くが、卵を産んだ直後には、「ヒ〜ヒヨヒヨヒヨ」と特別な鳴き声を出していた。

卵を産んであった場所と模様を確認したら、同じような模様の卵はだいたいいつも同じ所に生んであったので、メスにはそれぞれ卵を産むお気に入りの場所があるように思った。



〈家でとれた卵〉



〈うずらの目玉焼き〉

4. 今後について

家でとれた卵をふ化させてみたい。調べてみると、飼われているうずらは人に慣れるようになり、大人しく抱っこできることが分かった。そのため、次にふ化させたときには、もっとなついてもらえるように世話の仕方を工夫して、手乗りうずらにしてみたい。なついてくれたら、もっと近くでいろいろなところをじっくり観察して研究を深めていきたい。

たくさんフンをするので、畑の肥料としてニワトリのフンを使うように、うずらのフンを活用する方法を考えたい。段ボールコンポストのように、自分で肥料化できないか実験して、うずらが食べられる小松菜などを育てて、サイクルできる仕組みを作りたい。